

『エッセー』第1巻第32章と第34章における 「運命」と神意の解釈の問題

奥村 真理子

I. 「運命」の諸相

「運命の変化は定めなく、さまざまであるから、当然、われわれの前にあらゆる様相を示す」(L'inconstance du bransle diuers de la fortune fait qu'elle nous doieue presenter toute espece de visages) (I, 34, p.338/p.220)¹⁾。『エッセー』第1巻第34章「運命はしばしば理性の歩みと一致する」(La fortune se rencontre souuent au train de la raison)の冒頭である。珍しい出来事を運命の仕業として、軽妙な筆致で列挙した章である。運命は、毒殺を謀った人間に正義の働きを示すかと思えば、時にはわれわれをからかって、花嫁のために手柄を立てようとした新郎を、かつての恋敵の捕虜にしたうえ、新婦に解放を頼ませる。時には、地雷で宙に飛んだ城壁を元通りに落下させ、奇蹟と張り合うことを面白がる。時には、不治の病から逃れるために死のうとした病人を治療する。思うように描けないことに苛立ちやけを起こした画家に代わって絵を仕上げ、彼の技巧を凌ぐ。かと思えば、夫王に敵対して軍を率い出帆した王妃を意に反した所に漂着させることで、敵の待ち伏せから命拾いさせる。初版の結びは、「運命はわれわれよりも思慮深い」。メナンドロスの句だが、ここでは、犬に投げ損なった石で継母を死なせた人間が口ずさんだことになっている。

事例はすべて古今の書物からの借用。最後の投石の話でさえ、プルタルコス『魂の平静について』と『七賢人の饗宴』にある喩え話の台詞を変えた借用だ。モンテーニュは出典にほぼ忠実に出来事の経緯を叙述している。

しかもそれらの大部分に、「運命」(la fortune)に容易に繋がる語が用いられている。

画家プロトゲネスの事例は大プリニウスの『博物誌』にある。モンテーニュのテキストと比較してみよう。

モンテーニュ : Surpassa elle pas Protophenes en la science de son art? Cestuy cy estoit peintre, & ayant parfaict l'image d'un chien las & recreu, a son contentement en toutes les autres parties, mais ne pouuant représenter a son gré l'esume & la baue, despité contre sa besongne prit son esponge, & comme elle estoit abreuée de diuerses peintures, la ietta contre pour tout effacer. La fortune porta tout a point le coup a l'endroit de la bouche du chien, & y parfournit ce a quoy l'art n'auoit peu attaindre. (pp.341-342/ p.221)

プリニウス : Est in ea canis mire factus, ut quem pariter et casus pinxerit. Non iudicabat se in eo exprimere spumam anhelantis, cum in reliqua parte omni, quod difficillimum erat, sibi ipse satisfecisset. Displicebat autem ars ipsa : nec minui poterat et uidebatur nimia ac longius a ueritate discedere, spumaque pingi, non ex ore nasci. Anxio animi cruciatu, cum in pictura uerum esse, non uerisimile uellet, absterserat saepius mutaueratque penicillum, nullo modo sibi adprobans. Postremo iratus arti, quod intellexeretur, spongeam inepigit inuiso loco tabulae. Et illa reposuit ablatos colores qualiter cura optauerat, fecitque in pictura fortuna naturam.²⁾ (下線は筆者。以下同じ。)

プリニウスが「芸術と偶然が一緒に描いたようである」と、両者の合作を述べているのに対し、モンテーニュは運命が画家の技術を凌いだとしている。この点を除けば、モンテーニュが多少簡略化しているものの、出来事の叙述はほぼ同じである。モンテーニュは、プリニウスの上記の文中の«casus»と、「絵に運(偶然)が自然を作り上げたのである」という文の«fortuna」という言葉から、この事例を「運命」«la fortune»の諸相の一つにしたようである。

レンツォが地雷を仕掛けたのに、宙に浮いただけで元通りに立ったアロナの城壁のエピソードは、デュ・ベレー兄弟の『回想録』にある。

モンテーニュ：Car le capitaine Reusé (*sic*) assiegeaut (*sic*) pour nous la ville d'Eronne, & ayant fait mettre la mine soubz vn grand pan de muraille, & le mur en estant brusquement enleué hors de terre, recheut toutes-fois tout empanné si droit dans son fondement, que les assiegez n'en vausirent pas moins. (p.341/*ibid.*)

デュ・ベレー兄弟：Le seigneur Rence, estant arrivé devant ladite ville d'Aronne, fait soudainement faire les approches, et, après avoir mis ses pièces en batterie, et avoir battu vingt ou vingt-cinq jours, et fait donner deux ou trois assaux, ausquels noz gens furent repoussez, délibéra tenter autre fortune, ce fut de miner la place ; mais, après avoir miné un grand pan de mur, faisant mettre le feu dedans les mines, la muraille estant enlevée en l'air, en lieu de se renverser dedans les fossez, retomba dedans ses fondemens, et demoura debout ; à raison de quoy, se voyant frustré de son intention, et avoir perdu tant de temps, fait sa retraite en nostre camp.³⁾

モンテーニュは、『回想録』のわれわれが下線を引いた「mais」から「debout」までの出来事をほぼ忠実に叙述している。モンテーニュが省略したそれまでの経緯の最後の、レンツォが別の攻撃法として地雷を仕掛けることにしたことを記す文中にある「tenter autre fortune」が、モンテーニュに、この逸話を「運命」(la fortune)の仕業に変えさせたと考えられる。

もっとも、記憶の混乱が見られる叙述もある。婚礼の当日、手柄を立てようとしたのに、かつての恋敵エストレの捕虜となり、せっかく勝ち取った花嫁に解放を頼んでもらうはめになった新郎リックの事例である。この話も『回想録』にあるが、モンテーニュは一連の戦いの経緯を混同している。モンテーニュは、リックが「花嫁のために敵の槍をへし折ってやろうという気を起こして」(ayant enuie de rompre vn bois en faueur de sa nouvelle espouse)と

書いているが(p.339/p.220),『回想録』にはリックに関してそのような記述はない。その代わりに、この小競り合いの後で若者たちが勝手に警報の聞こえた方へ次々と向かったことを記した箇所には、「la jeunesse, sans commandement, y alla à la file, en espoir, un chacun, de rompre sa lance」という記述がある⁴⁾。また、そもそもこれら一連の出来事の元となったのはヌフォッセの襲撃なのだが、そのことをデュ・ベレー兄弟は、「messire Antoine de Créquy, seigneur du Pontdormy, /.../ fait une entreprise pour mettre vivres dedans Térouenne, et, en ce faisant, tenter la fortune s'il pourroit forcer le Neuf-Fossé⁵⁾」と書いている。この「tenter la fortune」という表現が、混乱した記憶の中で、先程の逸話と同様の連想をモンテーニュにもたらしたと考えることができよう。

このように「運命」に結びつき得る事例を、モンテーニュは集めてひとつの章に纏めている。ヴィレーはこの章を、珍奇な事例の蒐集を喜ぶ時代の好みに応えた「幼稚」なものとして評している⁶⁾。確かに上記のような原典との比較対照だけにとどまれば、モンテーニュ自身のものは、各事例に添えられた簡素な導入文と章のタイトルと冒頭文だけのようだ。モンテーニュは「同じ意図から生じたさまざまな結果」と題する章の一節で、「運命」が人間の知恵や技術を上回り、常に出来事を支配する鍵を握っているという考えに基づいて、「運命」が医術、詩作、弁論、絵画、作戦計画において大きな部分を占めることを論じている(I, 24, pp.158-162/pp.127-128)。第34章の「運命」の諸相はこの論考を、流行の型に合わせて仕立てたものと解釈することもできよう。しかし、各事例の出典とモンテーニュのアレンジをさらに比較対照すると、この章は決して「幼稚」なものでも、単純に時代に迎合したものでもない。

II. 無視された神の恩恵

イザベル王妃の事例はフロワサールの『年代記』にある。この事例の出典箇所は、出典を確定し難しいイアソンの事例を別にすれば、初版のこの章に「運命」の諸相として借用されたもののうち、唯一「運命」に直接繋がる語句

を含まない。これに関してD. Martinは、「fortune de mer」あるいは単に「fortune」が「嵐」«tourment»の同義語だったことから、原典の«tourment»をモンテーニュが「嵐」という意味で«fortune»に替えた結果、「fortune」が「運命」を意味するに至ったと推測している⁷⁾。あり得ることだ。だが他方、一目瞭然の事実がある。モンテーニュが読んだと推定されるテキストには、王妃とその軍隊が嵐のために目指していた港に着けなかったことが、次のように記述されている。

mais ils ne peurent car un grand tourment les print en mer : qui les mit loing de leur chemin, qu'ils ne sceurent par deux jours ou ils estoient. Dequoy Dieu leur fit grand'grâce. Car, s'ils se fussent embatus en iceluy port qu'ils avoyent avisé, ils eussent esté perdus, et cheus es mains de leurs ennemis : qui bien savoyent leur venue, et les attendoyent là endroit, pour les mettre tous à mort.⁸⁾

この出来事は«Dequoy Dieu leur fit grand'grâce」と、神の恩恵に帰されている。これを無視してモンテーニュは運命の仕業にしている。これは、漂流の日数の省略を除けば事件の経緯が忠実に借用されていることと、対照的である。

N'adresse elle pas quelque fois nos conseils & les corige? Isabel royne d'Angleterre ayant a repasser de Zelande en son royaume avec vne armée en faueur de son fils contre son mary, estoit perdue si elle fut arriüée au port qu'elle auoit proieté, y estant attendue par ses ennemis. Mais la fortune la print en mer, la ietta contre son vouloir ailleurs, ou elle print terre en toute seurté. (I, 34, pp.342-343/pp.221-222)

モンテーニュが«Dequoy Dieu leur fit grand'grâce」という文を読み落とした、あるいは忘れたとは考え難い。モンテーニュは、信じ難い事柄の信憑性の判断について一章を設け、奇蹟 (miracle) の否定と断定に関して慎重な考察を

行なっている (I, 27 : «C'est folie de rapporter le vrai et le faux a nostre suffisance»). しかもフロワサールのことを「書物について」の章では、卓越した判断力を備えた歴史家と同様に好きな、「きわめて単純な歴史家」の代表として挙げているのに (II, 10, p.118/p.417), そこでは信憑性の低い奇蹟の証人の筆頭に挙げているからである。

Quant on trouue dans Froissard que /.../, on s'en peut moquer, & /.../ Car l'autorité des(sic) ces tesmoins n'a pas a l'adventure assez de rang pour nous tenir en bride. (I, 27, pp.246-247/p.180)

『年代記』の記述は頻繁に出来事を神に帰する。それが「神の恩恵」とされている場合、結果的には、著者自身はその人物の側に与していることになる。だが、おそらくフロワサールはあまり深く考えることなくそうしているのだ。たとえば、彼が時に親英的、時に親仏的であることは、当時の国民意識の未発達と庇護者の属する陣営に由来すると解釈できよう⁹⁾。他方、ランソンはフロワサールの公平さを次のように弁護している：「もし彼の物語がイギリス側ではイギリス最良、フランス側ではフランス最良であるとすれば、それは全く、われ知らずそうだったのであって、それは単に、彼に情報を与えた当事者又は目撃者の熱意が彼に反映したからにほかならない」¹⁰⁾。モンテーニュはこれと同様の見方をしている：「単純な歴史家は、自分のものを混ぜるだけの力がなく、知識に入ってくるすべてのものを丹念に、懸命に蒐集し、あらゆる事柄を選別も選択もせず、誠実に記録する (enregistrer en bonne foy) だけで、真実を見分ける判断はすべて読者に一任する」(II, 10, p.117-118/p.417)。また、これに直ちに続けて「たとえば、特に」とフロワサールを挙げる時、*«le bon Froissard»*と呼んでいる (p.118/*ibid.*)。モンテーニュによれば、「裸の、形を成さない歴史の素材」である彼の記録は、「当時流布していたさまざまな噂や、人から聞いたいろいろ違った話をもそのままに伝えている」のである (*ibid.*)。それ故、モンテーニュが『年代記』の中で神の恩恵

の記述を読む時も、そのように出来事を仕立てたのはフロワサル自身ではなく、それを彼に証言した人々なのだと了解している。したがって、この出来事の叙述における「神の恩恵」は敢えて無視され、「運命」の仕業に変えられたと考えるのが妥当である。

Ⅲ. 「運命の正義の働き」と「神の裁き」

フロワサルから借用された事例に関してと同様のことが、最初の事例、すなわちモンテーニュによれば運命の「正義の働き (action de iustice) が明白に現れた」(p.338/p.220) 出来事についても言える。

これは、後のブルクハルトも書き落とさない¹¹⁾、毒殺計画の失敗によって、教皇アレクサンデル6世と、その息子で、マキアヴェッリが『君主論』で理想の君主の範としたことで有名な、あのヴァレンチノ公ことチェーザレ・ボルジヤが毒に倒れた事件である。もっとも、今日この毒殺陰謀説は否定され、熱病説が定説なのだが。モンテーニュの記述では、ヴァレンチノ公がアドリアノ枢機卿に飲ませるために用意した毒入りのぶどう酒を、誤って教皇と公自身が飲んでしまい、教皇は急死し、公も重い長患いをするとともにその後さらなる悲運に見舞われた。これはヴィレーの指摘¹²⁾通り、グイッチャルディーニの『イタリア史』からの借用と見なしてよい。同じ著者の『フィレンツェ史』の第24章にもこの事件は記載されているが、教皇が毒殺を謀ったとされている点が決定的に異なる。また事件の経緯の叙述も、『イタリア史』の方がモンテーニュのそれにきわめて近い。そこでは次のように記されている。

narrasi adunque che avendo il Valentino mandati innanzi certi fiaschi di vino infetti di veleno, e avendogli fatti consegnare a un ministro non consapevole della cosa, con commissione che non gli desse ad alcuno, sopravvenne per sorte il pontefice innanzi a l'ora della cena, e, vinto dalla sete e da' caldi smisurati ch'erano, dimandò gli fusse dato da bere, ma perché non erano arrivate ancora di

palazzo le provisioni per la cena, gli fu da quel ministro, che credeva risersarsi come vino più prezioso, dato da bere del vino che aveva mandato innanzi Valentino; il quale, sopraggiugnendo mentre il padre beeva, si messe similmente a bere del medesimo vino.¹³⁾

モンテーニュは、「喉の渇きと猛暑に参って」(vinto dalla sete e da'caldi smisurati ch'erano)という箇所を省く以外は経緯を原典に忠実に叙述している。事件の解釈についても、「偶然」(per sorte)という表現における«fortune»の類義語«sorte»を「運命」«la fortune»と訳して、「運命の正義の働き」としただけであるかのように思われる。しかし『イタリア史』の著者は、この出来事を運命にも偶然にも帰していない。

グイッチャルディーニは事件の顛末を記述した後、葬儀に「大喜びで集まった」ローマ市民が「飽きることなく見つめた」「蛇」、すなわち教皇が、「度を越した野心と有害な不実、おぞましい残酷、非道の淫蕩、前代未聞の吝嗇によって、聖なる事柄と俗事を無差別に売ること、世間に毒を広めた」と語る¹⁴⁾。それにもかかわらず、彼が生涯「ほとんど常に幸運に恵まれ続けて高位にあった」ことに関して、『リコルディ』(C)92¹⁵⁾と同様の、次のようなコメントを加える。

これは、人間の目の無力さゆえに神の審判の深遠さを見抜けると自惚れて、あたかも、多くの善良な人が不正に虐げられたり、邪悪な心の人の多くが不当に称えられることが全くないかのように、人間に起こる好都合な事や不都合な事はその人の功德や罪過に起因するのだ、と断言する人々の傲慢さを挫くことのできる例である。

しかし、グイッチャルディーニは、「神の裁きと力に例外が設けられているかのように解釈する」こともまた傲慢として斥けて、次のように続ける。

神の裁きと力の大きさは、狭い目下の範囲に限られるのではなく、別の時と所において広きに渡って正と不正を見分け、永遠の報酬と罰を与えるのである¹⁶⁾。

グイッチャルディーニもまたモンテーニュと同様、しばしば人間の理性に勝る運命の力を重視している。それは「リコルディ」の端々に顕著に表れている。「イタリア史」の冒頭でも、「運命の頻繁な変化」(spesse variazioni della fortuna)に言及している¹⁷⁾。だが、教皇の不慮の死に関しては、神の裁きと見なしているのである。神の裁きの遅滞は古代以来しばしば論じられてきた。モンテーニュが愛読したプルタルコス「モラリア」にも、「なぜ神の裁きはしばしば悪事の処罰を延期するのか」という作品がある。この作品からの借用は、「エッセー」初版では第2巻第5章に3回、同第12章に1回、第31章に1回である。1580年以降も計7回の借用がさらになされている¹⁸⁾。また、モンテーニュは神に対する人間の無知を繰り返し強調している。とりわけ、人間の理性が神の事柄について考える時は特に踏み迷っており、人間の尺度でしか考えられないことを初版で論じた箇所に、上記のプルタルコスの作品中の、無知な人間が神々のことを論じる傲慢さに関する一節を1588年版で借用加筆している¹⁹⁾。神について論じる無知な人間の傲慢という問題が、継続的にモンテーニュの注意を喚起していたことの証左である。したがって、「神の裁きの深遠さを見抜けると自惚れる」「人間の目の無力さ」に言及したグイッチャルディーニのこの文章は、モンテーニュの注意を引いたに違いない。それにもかかわらず、モンテーニュはこの事件を教皇への神の裁きではなく、ヴァレンチノ公への「運命の正義の働き」としているのである。

IV. 「われわれの奇蹟」

一見小さなアレンジだが、実は大きな変更を施された事例がある。モンテーニュはジャン・ブーシェの「アキタニア年代記」における奇蹟の記述について、「われわれはどんなことを言ってもよろしい。彼の信用は反駁する自

由を許さないほど大きくはないからだ」と断言している (I, 27, p.248/p.181). その『アキタニア年代記』から借用された、クロヴィス王とロベール王がそれぞれ包囲した城壁がひとりでに崩壊したという二つの事例である。ブーシェは「神の力によって」(divinement)と記している²⁰⁾。16世紀に誇張表現として盛んに用いられることで意味が弱まっていたこの副詞を、モンテーニュは「神の恵みによって」(par faueur diuine)と替えることで、神の介入をより明確にする (p.340/p.221)。だがそれは、予め「われわれの奇蹟」(nos miracles)と呼んでからだ。さらにそれらを、「われわれは…と言っている」(Nous tenons que)および「ブーシェがある著者から借用した話によると」(Bouchet emprunte de quelque autheur que)で導かれた節に入れる (*ibid.*)。それらが奇蹟であることの保証を引き受けないのである。それと同時に、これらの出来事を「奇蹟」だの「神の恵み」だのと言っているのは「われわれ」なのだ、という点を強調している。ブーシェのように出来事を安易に奇蹟と呼んで神を引き合いに出すことに対するモンテーニュの慎重な考えがここに読み取れる。これらの「奇蹟」と張り合う「運命」の仕業として挙げられる事例が、『回想録』から借用されたあの城壁の逸話である。この逸話が「運命」の仕業に変わった要因について«tenter autre fortune»という表現をわれわれは上で取り上げたが、それよりも大きな要因がここにある。この出来事を「われわれ」つまりフランス人は「神の恵み」と呼びたくないだろう。なぜなら「われわれ」の味方が仕掛けた地雷が功を奏さなかったからである。だが、味方に都合のよいことは神の御業としておいて、不都合の方は「運命」の仕業にするというのは、滑稽なご都合主義である。だから、ブーシェが記した奇蹟をモンテーニュは「われわれの奇蹟」と呼んでいる。『回想録』の中の城壁の逸話が「運命」の諸相の一つとしてこの章に借用されたのは、「われわれの奇蹟」と同じく城壁に纏わる出来事だからだろう。

V. フェレスのイアソンの事例

胸にできた膿瘍が治らないと医者に見捨てられたフェレスのイアソンは、

病から逃れるために死のうと戦闘に飛び込んだところ、ちょうどその部位を負傷したことで治った。医者役目をした「運命」のおかげである。この事例は第34章に借用されたもののうち、唯一ヴィレーが出典を確定していないものである²¹⁾。多数の著者がこれを利用しているからだ。しかしヴィレーは、確証はないと付け加えつつ、大プリニウスの『博物誌』のVII, 1を挙げている²²⁾。

E diuerso Pheraeus Iason deploratus a medicis uomicae morbo, cum mortem in acie quaereret, uulnerato pectore medicinam inuenit ex hoste.²³⁾

プリニウスのテキストはモンテーニュのそれよりかなり簡潔だが、確かに全体的には最も似ている。だが、モンテーニュの「これから逃れたいと思って敵の密集している真中に捨て身で突入した」という叙述に十分相当するものがない。

Quelque fois elle fait la medecine. Iason Phereus estant abandonné des medecins pour vne apostume, qu'il auoit dans la poitrine, ayant enuie de s'en défaire au moins par la mort, se jetta en vne bataille a corps perdu dans la presse des ennemis, ou il fut blessé a trauers le corps si a point que son apostume en creua & guerit. (I, 34, p.341/p.221)

もしもプリニウスのテキストだけに拠ってモンテーニュがこれを書いたのであれば、叙述を補ったことになる。だが、この章の他の事例の原典との比較対照では、モンテーニュが事件の経緯を忠実に借用しつつも、若干簡略化する傾向が見られた。この借用が逆の方向に向かっていることは例外なのだろうか。

ヴィレーが指摘したテキストのうち、出来事の経緯の叙述がモンテーニュに十分な材料を提供するのは、メシヤの『教訓さまざま』III, xvである。人

物の名前が違うが(『回想録』からの借用にも見られた通り、記憶違いや混同は『エッセー』には珍しくない)、メシャがこの事例とともに挙げているウァレリウスからの事例にIason Phereeという名前が記されている。

Valere recitant le mesme fait entre ses miracles, dit que l'homme qui fut guaruy de sa playe, par la playe estoit nommé Iason Pheree. Pline escrit d'vn autre qui se nommoit Falerec/*e*²³⁾, qui auoit vne maladie incurable d'vn flux de sang continuel par la bouche, à cause d'vne veine rompue, & se trouuant desesperé de guarison, se mit en vne bataille, & s'y presenta sans armes, affin que les ennemis le tuassent pour sortir de ceste douleur; or aduint qu'il fut nauré en la poitrine, & de la playe sortit grande abondance de sang cessant le flux de la bouche : depuis les medecins en guarissant sa playe, consoliderent la veine rompue, & demeura sain & guaruy de toutes les deux playes.²⁴⁾

他の著者のテキストには欠けている、モンテーニュの「せめて死んでもよいからこれから逃れたいと思い、敵の密集している真中に捨て身で突入した」という箇所には十分相当する叙述が、ここにはある。この男は「治る望みがないので、敵に殺されてこの苦しみから脱しようと、武器を持たずに戦闘に参加した」のである。このことから、モンテーニュはこのテキストを読んだと思われる。しかしメシャの叙述では、出来事の主人公は負傷した後、医者に傷と膿瘍の治療を受けており、それによって両方が治った。これでは「運命」の治療への貢献度は半減だ。だが、メシャはこの事例を、「敵から傷を受けることによって病気が治った者について、および類似の例」(D'vn qui en receuant vne playe de son ennemy, fut sauué d'vn mal qu'il auoit : avec semblables exemples.)²⁵⁾と題する章に入れている。もしもモンテーニュがこのテキストだけに典拠したのであれば、このタイトルが記憶に残り、事例の後半の叙述を忘れたか、省略したことになる。メシャのテキストの前半における膿瘍の詳細な記述もモンテーニュのテキストにはないので、その可能性は高い。

ヴィレーが挙げた他のテキストは、簡略すぎるか出来事の経緯が違う。キケロの『神々の本性について』と、これに典拠したラ・ラメー(ラムス)の『弁証法』は、モンテーニュが第34章におけるような叙述を行うには内容的に不十分である。セネカの『恩恵について』とウァレリウス・マクシムスの『著名言行録』では、イアソンに斬りつけたのは戦場の敵兵ではない。暗殺者のようだ。

キケロ：nec prodesse Pheraeo Iasoni is qui gladio vomicam eius aperuit quam sanare medici non potuerant.²⁶⁾

ラ・ラメー：A Phérée Jason profita son ennemy, qui de son espée fait ouverture de l'apostume que les médecins ne pouvoient guérir.²⁷⁾

セネカ：Quaedam prosunt nec obligant : tuber quidam tyranni gladio diuisit, qui ad occidendum eum uenerat; non ideo illi tyrannus gratias egit, quod rem, quam medicorum manus reformidauerant, nocendo sanauit.²⁸⁾

ウァレリウス：Diuinae Fortunae uulnus Pheraeo Iasoni quidam cupidus exitii eius intulit. Nam cum inter insidias gladio eum percussisset, uomicam, quae a nullo medicorum sanari potuerat, ita rupit ut hominem pestifero malo liberaret.²⁹⁾

もう二つ、ヴィレーの註にはないが、プルタルコスの『いかに敵から利益を得るか』の中にも、人名が違うが同様の事例が見つかった。だが一方は病名も異なるうえ、どちらも戦闘に言及していない。

Telephus, à faulte de medecin amy, fut contraint de soubmettre son vlcere au fer de la lance de son ennemy :³⁰⁾

Car ainsi comme celuy qui auoit entrepris de tuer Prometheus le Thessalien, luy donna de l'espee si grand coup sur son apostume, qu'il la luy couppa en deux, & luy sauua par ce moien la vie, l'apostume estant creuee :³¹⁾

これらだけに拠って第34章に見られるような叙述をすることは不可能である。したがって、モンテーニュの典拠はメシャとプリニウスの両方ではないかという推測が成り立つ。しかし、それらに加えて他のテキストのいくつかをモンテーニュは読んでいたと考えられる。セネカとプルタルコスについては言うまでもないだろう。キケロに関しては、『神々の本性について』からの『エッセー』初版への借用はヴィレーによれば無いが³²⁾、少なくとも間接的あるいは断片的に読んでいた可能性は否定できない。ウァレリウス・マクスィムスについては、『エッセー』初版に直接借用した箇所が推定されている³³⁾。

そこで、どのような事柄の例として挙げられているかを見よう。メシャは、前述のように「敵から傷を受けることによって病気が治った者について、および類似の例」と題した章の中にこの事例を入れ、前章で述べられた音楽による病気の治療を信じられないことだと見なしてはならない理由として、他の例とともに列挙している³⁴⁾。プリニウスは、人間の生の不確かさとはかなさを述べている：«*Incertum ac fragile nimium est hoc munus naturae*»³⁵⁾。ラ・ラメーは、「*Efficiente par accident*」の中の«*Efficiente par fortune*»の項にこの事例を引く際、「*Ainsi par cas fortuit dict Cicéron au troiziesme de la Nature des dieux*»と述べて、偶発事の例としている³⁶⁾。しかしキケロは「偶発事」とは言っていない。ただ、意図（ただしここでは加害者の意図を指す）とは逆の結果が生じる例としてこの事例を挙げている：«*Multi enim et cum obesse vellent profuerunt et cum prodesse obfuerunt*»³⁷⁾。セネカはこの事例を、助けられても恩義を負わなくてよい例として挙げ、偶然に帰している：«*casus enim beneficium est, hominis iniuria*»³⁸⁾。ウァレリウス・マクスィムスは、神々が定めた運命としている：«*Diuinae Fortunae uulnus Pheraeo Iasoni quidam cupidus exitii eius intulit*»³⁹⁾。プルタルコスは、悪口を言われた人間が利益を得ることの譬えとしている：«*il n'y en (=de vtile & de profitable) a pas moins à estre iniurié, repris & blasmé de ses ennemis*»⁴⁰⁾。

これらのテキストの無意識の混同もしくは自由な組み合わせによって、そこに用いられた«*incertum*», «*par fortune*», «*par cas fortuit*»または«*casus*»から、

「運命」*«la fortune»*が連想されたと考えることもできよう。しかし、数々の著者が各人各様に利用していることをおそらく知っていたモンテーニュが、この有名な事例を「運命」の諸相の一つに加えていることは注目に値しないだろうか。しかも、グイッチャルディーニの神の裁きとフロワサールの神の恩恵は無視されて「運命」の仕業に替えられ、ブーシェの奇蹟は「われわれの奇蹟」に変えられていた。すでに述べたように、モンテーニュは「神の御業」や「奇蹟」の断定に対して敏感に慎重さを示すのである。これらのことを合わせて考えるなら、メシヤのテキストにおけるウァレリウスの*«miracles»*という語、あるいはウァレリウスのテキストにおける*«Diuinae Fortunae...»*という文がモンテーニュを刺激して、上記の借用と同様に、敢えて「運命」の諸相の一つに変えさせたと考えられないだろうか。

Ⅵ. 「天命を判断するには慎ましくすること」

以上のことから、珍しい事例を「運命」の仕業に仕立てて軽妙な筆致で列挙しただけに見えるこの章は、実はそのように単純でも「幼稚」でもないと思われる。神の裁きや恩恵とされている事件を、モンテーニュは何故黙って「運命」の仕業に変えたのか。また、何故「運命」に「われわれの奇蹟」と張り合わせたのか。

第34章「運命はしばしば理性の歩みと一致すること」の二つ前の第32章のタイトルは、「天命を判断するには慎ましくすること」(*Qu'il faut sobrement se mesler de iuger des ordonnances diuines*) (I, 32, p.329/p.215)である。モンテーニュは、錬金術師、予言者、占星術師、手相占い師、医者など「作り話を語る連中」(*ceux qui nous content des fables*)の中に、「神意を四六時中解釈し記録する連中」(*gens interpretes & contrerolleurs ordinaires des dessains de Dieu*)を「敢えて加えたい」と言う(pp.329-330/*ibid.*)。彼らが「出来事の原因を見出し、隠された神の意志の中に御業の知り得べからざる動機を見出すと称し、常に多種多様で矛盾する出来事に振り廻されながらも」、「同じ一本の鉛筆で白く描いたり黒く描いたりしている」からだ(p.330/*ibid.*)。これに対して

彼は言う。

キリスト教徒たるものは、すべてを神に由来すると信じて、神の神聖な計り知れぬ知恵に感謝して受け取り、どんな形で与えられようと、よい意味に受け取れば十分である。(ibid./p.216)

だが、「作り話を語る」ことと同一視されている神意を解釈することと、すべてをよい意味に受け取ることとの違いは、実際において微妙である。神の恩恵に感謝することはどちらの範疇に入るのか。モンテーニュは、宗教を強化支持するために神を引き合いに出すことの危険性を指摘する。

けれどもよくあるように、われわれの企ての幸運や成功を利用して、宗教を強化し、支持しようとするやり方はいけないと思う。われわれの信仰はほかに十分な根拠をもっているから、出来事によって権威をつけてもらう必要はない。民衆はこういうまことしやかな自分の好みに合う論法に馴れてしまうと、次の機会に出来事が期待に反して不利になった場合には、信仰を動揺させるおそれがあるからだ。(pp.330-331/ibid.)

確かに、モンテーニュが宗教戦争におけるプロテスタント側の例を挙げて説明している通り、一つの勝利を「味方に対する神の恩恵の確かな証拠」(certaine approbation de leur party)と唱えれば、次に敗戦したとき「天の父の笞と、懲らしめ(verges & chastimens paternelz)だと弁解」しても、民衆の信仰を動揺させることになる(p.331/ibid.)。では、神意を解釈せずに、どのように「よい意味に」受け取ればよいのか。モンテーニュは「むしろ民衆にはありのまま(vrais fondemens de la verité)を話すのがよい」と、対オスマン戦における連敗の後のレパントの海戦の勝利を例にとって見本を示す。

C'est vne belle bataille nauale qui s'est gaignée ces mois passez contre les Turcs

sous la conduite de don Ioan d'Austria, mais il a bien pleu a Dieu en faire autres-fois voir d'autres telles a nos despens.(p.332/*ibid.*)

しかし、どのように「ありのまま」を話そうとしても、神の御業を人間の不完全な言葉で表現することには限界がある。そのことをモンテーニュはよく承知している («Je ne trouve pas bon d'enfermer ainsi la puissance diuine sous les lois de nostre parole.» (II, 12, p.288/p.527)). だから、すぐさま続けて言う。

Somme il est mal aysé de ramener les choses diuines a nostre suffisance / (B) balance /, qu'elles n'y souffrent du deschet.(I, 34, p.332/p.216)

無論«somme»は「要するに」だが、ここでは同時に収支決算をも意味する。戦勝を「神の恵みの確かな証拠」と呼び、敗戦を「天の父の咎と、懲らしめ」と弁解することは、すでにこの章でモンテーニュがラブレールも用いた表現を使って表現しているように、「一袋の麦で二袋分の挽き賃を取る」(prendre d'un sac deux mouldures) (p.331/*ibid.*)というずるい儲け方と受け取られても仕方がない。だが「ありのまま」を話そうとして、「見事な海戦」の損失支出(a nos despens)が複数、獲得収入(qui s'est gagnée)が1では、赤字になる。だから、「神の御業をわれわれの能力に合わせる / (B) 天秤にかけて計る / のは難しいことで、目減りなしにはすまない」のである。テキストBは上記の麦の比喩に一層呼応している。しかも、これはキリスト教連合軍対イスラム教徒のオスマン帝国軍の戦いである。結局、「目減りなしに」すませるには、はじめから個々の出来事について一々神の御業に言及しないほうが容易だということではないか。

第34章の城壁に纏わる一節を思い出そう。城壁がひとりでに崩壊することも、地雷を仕掛けられた城壁が元通りに落下することも、稀に起こることなのだろう。これらのうち、自分たちに都合のよい一方の出来事を神の恩恵と言えば、他方も神の御業に帰した解釈を行なわねばならなくなる。だからモ

ンターニユは、プーシェが記した奇蹟を「われわれの奇蹟」に変え、「運命」にこれと「張り合うことを面白が」らせたのではないか。

「夫を敵として息子に味方するために軍隊を率いて」(p.342/p.221) 出帆したイザベル王妃は、フロワサールの『年代記』では神が恩恵を施して命拾いした。この神の恩恵の記述も、上に述べたようにモンターニユによれば、取材した事件に関する証言をそのまま誠実に記しているのだろう。『年代記』によれば、夫のエドワード2世は王としての資質に欠ける人物で、一部の寵臣を優遇して貴族たちの不満を招く処置を取り、なおかつ王妃に冷たい態度を取っていた。フロワサールに情報を提供した証人が、王への反感もしくは王妃への同情、あるいは王妃が味方した息子のエドワード3世への好意を抱いていれば、証人にとっては神が彼女を救うに値する。だが、王妃が夫を廃位するために協力を得た重臣モーティマーと愛人関係にあったことのほうに着目すれば、彼女は夫を裏切った不貞の妻である。その場合、不治の病から逃れるために死のうとした病人や、作品に満足できず短気を起こした画家を助けるという事例の次に描かれた、夫に叛旗を翻した不貞の妻まで助けるという運命の仕業は、さまざまに変化する定めなき「運命」(*inconstance du bransle diuers de la fortune*)の皮肉となる。モンターニユが言うように、「われわれは婦人の貞潔を熱望し顧慮するあまり、善良な婦人、立派な婦人、正しく徳の高い婦人というときには、実際には貞潔な婦人だけを意味するようになった」(II, 7, pp.65-66/p.384) 社会であれば、なおさらだ。モンターニユは王妃の話を次のように導入している。「運命は時としてわれわれの意図を是正し、矯正するのではないか」(*N'adresse elle pas quelque fois nos conseils & les corige?*) (I, 34, p.342/p.221)。これも皮肉になる。しかし、モンターニユが「運命」の相の導入に「時として」(*quelque fois*)という言葉を何度も繰り返しているように(p.339; p.340; p.341; p.342/ p.220; p.221)、「運命」は定めない変化をするものなのだから問題はない。ところが、王妃への神の恩恵と説くとなると話は違う。ましてや王妃は後にエドワード3世によって幽閉の身となった。あの時王妃に恩恵を施した神はこの時何もしなかったのか、とい

う素朴な疑問や反論は予想に難くない。

第32章のモンテーニュの話はまだ終わらない。トイレで死んだ「異端の二人の首領」であるアリウスと教皇レオ、ヘリオガバルス、および聖人イレナエウスの例が引かれる。先の三名がそのような死に方をしたことを「神罰」(vengeance diuine)に帰するなら、同じ死に方をした聖人についてどう言えばよいのか (I, 32, pp.332-333/p.216) と畳みかけるのである。

グイッチャルディーニからの借用を思い出そう。いかに悪徳に塗れた人物であったにせよ、また「最大の希望の絶頂における」(nel colmo più alto delle maggiori speranze)⁴¹⁾あまりにも突然の死であったにせよ、〈神の代理人〉の死を神の裁きに帰することは如何なものか。特にモンテーニュの時代には、カトリック陣営とプロテスタント陣営が交えていた戦火に油を注ぐようなものだろう。モンテーニュはこの出来事を、神罰ではなく「運命の正義の働き」に変えたうえ、裁かれたのは教皇ではなくヴァレンチノ公にした。これにあの新郎リック殿の苦笑を誘う逸話が続き、「運命」の一貫性のなさ(inconstance)が顕著になる。メナンドロスの句を除けば、この章に行を変えて引用された句は、この逸話に挿入されたカトゥルスの詩句だけである。この詩句はモンテーニュの、「婚礼の当日、しかもなお悪いことには寝る前になって」(p.339/p.220)という叙述内容と重複する。だが、結婚早々新郎から引き離された新婦を強調することで、いい恰好をしようとして恰好がつかない結果になった新郎の逸話の面白おかしさがいや増す。このように「ときとしてわざとわれわれをからかう」「運命」の仕業だからこそ、ヴァレンチノ公になされたような「正義の働き」も、常になされるとは限らない当てにならないものになる。聖人が、異端説の提唱者や忌まわしい行状で知られる暴君と同様の死に方をしているのに、後者たちへの神罰を主張する場合とは大きく違う。

VII. 個々の出来事の、「運命」の相としての解釈

ところで、同じ死に方をした聖人についてどう言うのかと問いかけるモン

テーニユの語句はこうである。「Mais quoy? le martyr Irenée se trouue engagé en mesme fortune» (pp.332-333/p.216). 無論、この«fortune»は「不慮の出来事」乃至「不運」という程度の意味合いである。だが、この章でこの語が使用されるのはこれが最初ではない。宗教戦争における具体例が挙げられた箇所、戦勝は«cète fortune», 敗戦は«leurs defortunes」という語で表現されている (p.331/*ibid.*)。戦いに関してこれらの語は異論なくそういう意味で用いられる。このような«fortune»という語の多義性がモンテーニユに、出来事の解釈をめぐる問題を回避する方法をもたらず一つの要因になったのではないか。

これには、モンテーニユがすでに持っていた発想が大きく与っていると思われる。第34章のタイトルと冒頭文に用いられている表現は、モンテーニユが『エッセー』の初版を出版する10年前の1570年4月30日、『ラ・ボエシのラテン詩集』に書いた宰相ロピタル宛の献辞⁴²⁾にも見られる。この献辞の前半は、「運命」をモチーフにして次のように展開されている。ロピタルのように「運命と理性 (la fortune & la raison) から国政の管理を委ねられた」人物は、人材を正しく見極めて選択し配置することを何よりも配慮すべきだ。しかしこれは難しいことで、いかによく整った国家でもしばしばこれを誤っている。ところが、諸々の悪徳がはびこる国家でも、これが整然となされていることがある。これは「運命」 (la fortune) のおかげなのだ。「運命はさまざまに定めない動きをするので、理性の歩みと一致することがあるから」。そう考えることでモンテーニユは、親友のラ・ボエシが国家の要職に相応しい人物でありながら一生世に認められなかったことについて、自分を慰めてきた。だがラ・ボエシ自身は、「運命 (la fortune) を何とも思わない」ほどの徳を備えていたので、満足して生涯を終えた。その彼への友情の務めを果たすため、この詩集を出版することにした……第34章のタイトルおよび冒頭文と、ここに見られる「運命の動き」に関する表現は酷似している。

タイトル：La fortune se rencontre souuent au train de la raison.

冒頭文：L'inconstance du bransle diuers de la fortune faict qu'elle nous doiue

presenter toute espece de visages :

献辞： nous le devons sans doute à la fortune, qui par l'inconstance de son bransle divers s'est pour ce coup rencontrée au train de la raison.⁴³⁾

このような発想がすでにモンテーニュにはあった。この発想と上述の「運命」の支配力の認識、「fortune」の多義性、「常に多種多様で矛盾する出来事」に恣意的な神意の解釈をこじつける人々の存在、およびモンテーニュがそれに対して抱く慎重な考え、これらが第34章を生んだのではないか。「すべての事柄を神に由来すると信じて、感謝してよい意味に受け取ればよい」とは言っても、個々の出来事についてそれを人間の言葉に表すことは難しい。個々の出来事に関しては不問に付し、何もかも「すべては神の思し召し」とすれば問題は生じない。だが、人々は個々の出来事について解釈をしたがり、神の恩恵や裁きや奇蹟を口にしていまいがちだ。出来事を一貫性のない「運命」の諸相として描いた第34章は、「常に多種多様で矛盾する出来事」の解釈に関するこの問題を回避する方法として発想されたのではないだろうか。

註

- 1) 「エッセー」初版からの引用は、Michel Eyquem de Montaigne, *Essais, reproduction photographique de l'édition originale de 1580, publiée par D. Martin*, 2 vol., Genève-Paris, Slatkine-Champion, 1976によるが、印刷の都合で綴り字表記を一部現代語風に改めた(以下他のテキストも同様)。各引用末尾の括弧内の数字は巻、章、頁番号を示す。初版の頁番号の誤植が上記の版で修正併記されている場合は修正頁番号を記す。その後「/」で区切り *Les Essais de Michel de Montaigne, éd. P. Villey, rééd. V.-L. Saulnier*, 2 vol., PUF, 1978の該当頁番号を併記する。なおこの版の註等を参照する場合はVilley (PUF)と略記する。1588年版の加筆修正を併記する場合はこの版により、(B)で示す。和訳は岩波文庫の原二郎氏の訳を使わせて頂いたが、変更した箇所がある。
- 2) *C. Plini Secvndi Natvralis Historiae*, XXXV, xxxvi, 102-103, in Pline l'Ancien, *Histoire naturelle*, XXXV, Les Belles Lettres, «Collection des Universités de France», 1985, p. 80.

- 3) *Les Mémoires de Messire Martin Du Bellay, contenant le discours de plusieurs choses advenues au Royaume de France, depuis l'an 1513, jusques au trespas du Roy François 1^{er}; Ausquel l'auteur a inséré trois livres, et quelques fragmens des Ogdades de Messire Guillaume Du Bellay, seigneur de Langey, son frère. Œuvre mis en lumière, et présenté au Roy, par Messire René Du Bellay, chevalier de l'ordre de Sa Majesté, baron de La Lande, héritier d'iceluy Messire Martin Du Bellay*, Livre II, in *Fleurange, Louise de Savoye, Du Bellay*, Paris, Lyon, Guyot frères, 1850, p.182.
- 4) *Id., ibid.*, p.191.
- 5) *Id., ibid.*, p.190.
- 6) Villey (PUF), p.220.
- 7) Daniel Martin, *Montaigne et la fortune*, Genève-Paris, Slatkine-Champion, 1977, p.50.
- 8) *Le premier volume de l'histoire et cronique de Messire Jehan Froissard. Reveu et corrigé sus divers Exemplaires, et suyvant les bons Auteurs, par Denis Sauvage, de Fontenailles en Brie. A Lyon, par Jan de Tournes. M. D. LIX, I, x, 8*, cité par Villey in Michel de Montaigne, *Les Essais*, II (IV), Hildesheim · New York, Olms, 1981 (以下 Villey (Olms) と略記), p.107.
- 9) 日本フランス語フランス文学会編, 『フランス文学辞典』, 白水社, 1974, p.523.
- 10) Gustave Lanson, *Histoire de la littérature française, remaniée et complétée pour la période 1850-1950 par Paul Tuffrau*, Hachette, 1955, p.150. 和訳はランソン, チュフフロ, 『フランス文学史』, 有永弘人, 鈴木力衛訳, 中央公論社, 1979, I, p.94 を拝借したが, 若干表記を改めた.
- 11) ブルクハルト, 『イタリア・ルネサンスの文化』, 『ブルクハルト』, 柴田治三郎責任編集, 中央公論社, 〈中公バックス 世界の名著 56〉, 1979, p.181.
- 12) Villey (PUF), p.1251.
- 13) 「それ故, 次のように言われている. ヴァレンチノ公は毒を入れたぶどう酒を何本か予め送り, そのことを知らない給仕頭に, 誰にも飲ませないようにという命令とともに預けさせた. 教皇が偶然, 晩餐の時刻より早く, 不意にやって来て, 喉の渇きと猛暑に参って飲み物をくれるよう頼んだ. だが宮殿からはまだ晩餐用の支度が到着していなかったので, それが非常に貴重なぶどう酒だと思いついでいた給仕頭は, ヴァレンチノ公が予め届けていたぶどう酒を飲み物として出した. ヴァレンチノ公は, 父親が飲んでいる間に同じぶどう酒を同様に飲み始めた.」 (拙訳) Francesco Guicciardini, *Storia d'Italia*, VI, iv, in *Opere, a*

cura di Vittorio de Caprariis, Milano · Napoli, Riccardo Ricciardi Editore, «La Letteratura italiana, storia e testi : 30», p.617.

- 14) *Id., ibid.*, VI, iv, pp.617-618.
- 15) «Non dire : «Dio ha aiutato el tale perché era buono, el tale è capitato male perché era cattivo»; perché spesso si vede el contrario. Né per questo dobbiamo dire che manchi la giustizia di Dio, essendo e consigli suoi sì profondi che meritamente sono detti *abyssus multa*». *Ricordi*, 92, in Guicciardini, *op. cit.*, p.116.
- 16) «Esemplio potente a confondere l'arroganza di coloro i quali, presumendosi di scorgere con la debolezza degli occhi umani la profondità de' giudici divini, affermano ciò che di prospero o di avverso avviene agli uomini procedere o da' meriti o da' demeriti loro: come se tutto di non apparisse molti buoni essere vessati ingiustamente e molti di pravo animo essere esaltati indebitamente; o come se, altrimenti interpretando, si derogasse alla giustizia e alla potenza di Dio; la amplitudine della quale, non ristretta a' termini brevi e presenti, in altro tempo e in altro luogo, con larga mano, con premi e con supplicii sempiterni, riconosce i giusti dagli ingiusti». *Id., Storia d'Italia*, VI, iv, p.618.
- 17) *Id., ibid.*, I, i, p.373.
- 18) Villey(Olms), II(IV), «Table des ouvrages possédés par Montaigne et des auteurs cités», p.LXIVのPLUTARQUE. *Pourquoy la justice divine differe quelquefois la punition des malefices*の項目に拠って出した数値.
- 19) «Elle (=l'humaine raison) ne fait que foruoyer par tout, mais specialement quand elle se mesle des choses divines. /.../ L'homme ne peut estre que ce qu'il est, ni imaginer que selon sa perte *Ierr.*: portée *I.* (B) C'est plus grande presumption, dict Plutarque, à ceux qui ne sont qu'hommes, d'entreprendre de parler et discourir des dieux et des demy-dieux que ce n'est à un homme ignorant de musique vouloir juger de ceux qui chantent, ou à un homme qui ne fut jamais au camp, vouloir disputer des armes et de la guerre, en presumant comprendre par quelque legere conjecture les effects d'un art qui est hors de sa cognoissance.» (II, 12, pp.280-281/p.520)
- 20) «Récitent Grégorius et Annonius que luy (Clovis) tenant le siège devant la cité d'Engoulesme, les murailles de la ville tombèrent par terre, divinement.» Jean Bouchet, *Les annales d'Aquitaine, faicts et gestes en sommaire des Roys de France et d'Angleterre, & des païs de Naples et de Milan. Reveuës et corrigées par l'Autheur mesme : jusques en l'an mil cinq cens cinquante et sept.* Poitiers, par Enguilbert de Marnef, 1557, f° 36 r°, cité par Villey (Olms), p.106.

- 21) Villey (Olms), p.107.
- 22) *Id., ibid.*
- 23) Plinius, *op. cit.*, VII, L(51), 166, in *op. cit.*, VII, 1977, p.101.
- 24) *Les diverses leçons de Pierre Messie, avec trois dialogues dudit auteur, contenant variables et memorables histoires, mises en François par Claude Gruget Parisien, augmentées outres les precedentes impressions de la suite d'icelles, faite par Antoine Du Verdier*, A Lyon, par Estienne Michel, 1580, III, xv, pp.385-386. (^(?) eか*cに見える箇所が多数あるのでeかもしれない。)
- 25) *Id., ibid.*, p.385.
- 26) *M. Tullii Ciceronis De Natura Deorum*, III, xxviii, 70, in *Cicero, De Natura Deorum, Academica*, London-Cambridge, William Heinemann Ltd - Harvard University Press, «The Loeb Classical Library», 1961, p.354.
- 27) Pierre de la Ramée, *Dialectique (1555), édition critique avec introduction, notes et commentaires de Michel Dassonville*, Genève, Droz, «Travaux d'Humanisme et Renaissance : LXVII », 1964, p.70.
- 28) *L. Annaei Senecae De Beneficiis*, II, xviii, 8, in *Sénèque, Des Bienfaits*, I, Les Belles Lettres, «Collection des Universités de France», 1972, p.44.
- 29) *Valeri Maximi Factorvm et Dictorvm memorabilivm*, I, viii, ext. 6, in *Valère Maxime, Faits et dits mémorables*, I, Les Belles Lettres, «Collection des Universités de France», 1995, p.150.
- 30) Plutarque, *Comment on pourra recevoir vtilité de ses ennemis*, in *Les Œuvres morales & meslees de Plutarque, Translatees du Grec en François par Messire Jacques Amyot, à present Euesque d'Auxerre, Conseiller du Roy en son priué Conseil, & grand Aumosnier de France*. A Paris, De l'imprimerie de Michel de Vascosan, M.D.LXXII, f°111r°.
- 31) *Id., ibid.*
- 32) Pierre Villey, *Les Sources & l'évolution des Essais de Montaigne*, I, Hachette, 1908, p.104.
- 33) *Id., ibid.*, p.233.
- 34) «Lon ne tiendra point incroyable ce que nous auons dit par cy deuant, que par le moyen de la musique on guarit de quelques maux, veu que nous trouuons que par autres modes estranges il se fait des guarisons.» Messie, *op. cit.*, III, xv, p.385.
- 35) Plinius, *op. cit.*, VII, L(51), 167, p.101.

- 36) La Ramée, *op. cit.*, pp.69-70.
- 37) Cicero, *op. cit.*, III, xxviii, 70, p.354.
- 38) Seneca, *op. cit.*, II, xix, 1, pp.44-45.
- 39) Valerius Maximus, *op. cit.*, I, viii, ext. 6, p.150.
- 40) Plutarque, *op. cit.*, f°110v°
- 41) Guicciardini, *Storia d'Italia*, VI, iv, p.616.
- 42) *A Monseigneur, Monsieur de l'Hospital*, in Montaigne, *Œuvres complètes, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1962, pp.1363-1365.
- 43) *Id., ibid.*, p.1363.

«La fortune» et le problème de l'interprétation de la volonté divine dans les chapitres 32 et 34 du livre I des *Essais*

Mariko OKUMURA

Le chapitre 34 : «La fortune se rencontre souvent au train de la raison» du livre I des *Essais* est en apparence un simple recueil puéril de «singularités» et de «cas étranges» à la mode de l'époque interprétés comme «visages» de «la fortune» inconstante, mais il s'en faut de beaucoup qu'il le soit. La collation des descriptions faites par Montaigne avec ses sources nous atteste que, tout en empruntant presque fidèlement le cours des événements, dans quelques cas il a substitué «la fortune» à la cause que l'auteur original lui assignait : la grâce et la justice divines. De plus, il fait rivaliser ironiquement «la fortune» avec «nos miracles», en alléguant des événements semblables, l'un défavorable dont le témoin n'attribuait pas l'œuvre à Dieu, les autres favorables attribués à Dieu par l'auteur original. Or, dans le chapitre 32 du même livre : «Qu'il faut sobrement se mêler de juger des ordonnances divines», Montaigne ose assimiler aux inventeurs des «fables» ceux qui interprètent arbitrairement les desseins de Dieu malgré la variété et la discordance continuelle des événements. Il y montre la difficulté à ramener les choses divines à l'intelligence humaine sans qu'il y ait pour elles du «déchet». Les «visages» de «la fortune» inconstante, décrits dans le chapitre 34, ne sont-ils pas conçus pour éluder ce problème de l'interprétation des événements?